

B 29、馬町に投弾

山崎 昭 見

耳の底にのこる爆音

ブルンブルンというあのB 29重爆撃機特有のプロペラの音が二八年たった今も、私の耳の底にははっきりとこびりついている。

昭和二〇年一月一五日の夜一二時ごろであった。そろそろ床につこうかと思ったとき、どこからかこの爆音がかすかに聞こえてきた。おやつ、とすぐラジオのスイッチをひねってみたが、一向に警戒警報も空襲警報も出ていない。これはおかしい、あの爆音はたしかにB 29のにちがいない。半年も前から毎日々々ラジオはこの音を流し、この爆音をひびかせてB 29が我々の頭上に襲いかかる日の近いことを告げ、この爆音を警戒し、一刻も早くこの音を聞きわけるように、と注意していたのだ。「この空遠くからひびいてくる音はかねて聞いているB 29の爆音そっくりである。しかもラジオは沈黙している。どうもおかしい！」。私はとっさに防空頭巾をひっさげ自宅の屋上の見張台にかけ上がった。空は暗い。この音の聞こえてくる方向をたよりに、目を皿のようにして機影を求めていたとき、突如東南東の空から真紅の火の玉がスーッと二つ三つ糸を引くように降ってきた。おやつ！ 頭の上に降ってくるようにみえる。この火の玉の降ちるのを凝視していた間は数秒もなかったように思う。突然大爆音がとどろいたと思

ったら火の玉が四方八方にとび散った。距離は東南東三、四百メートルか、すぐ近くである。私の家の裏庭の辺にもチャリン、と何か金属片がとんできた音がした。いったい何だ！ 続いて何が起こるのか、と大爆音の方角を身のちぢむ思いで見ていると、ドッーと火の手が上がった。馬町（今の渋谷通り東大路東入）へんらしい。四、五か所から火がでていいる。このとき家や近所のラジオがけたたましい声で空襲警報、空襲警報と絶叫しだした。

当時私は町の防空長であった。町には老人と婦人、子供のほかには青壮年といえは私一人であった。また学区（六原）内でも永い戦争で青壮年はほとんど不具者以外は応召か徴用か学徒動員でかり出され、家にはいなかった。その中であって私達のような昭和二年度の徴兵検査を受けた者だけは何か目的があるのか赤紙もこず、最後まで銃後に残っていたのであった。そのかわり町内の防空長の他にも、学区の警防団長や翼賛壮年団長などと、むずかしい役は一手にひき受けさせられていたのである。

見張台へ

私は火の手のドッーと上がるのを見て、息をのんだ。いま私はどうすべきか、と瞬間自問自答した。私はいよいよ最後の秋^{とき}がやってきた、と思った。五体がブルブルと身ぶるいするのを感じた。かねて敵機の来襲には、最初に一機がやってきて、焼夷弾をおとして火の手をあげ、これを目標にB 29が大挙来襲して集中爆撃をするということを思いだした。私はすべりおちるように階段をかけおり、家内に町内の全員に急をつげ、かねての演習のとおり防空態勢に入るように命じ、再び見張台にかけ上がった。そして南方の空に全神経を集中して敵機影を求め、また一方ラジオの放送に耳をかたむけた。その上私の頭の中には、さっき庭先にチャリンーと

音をたてて飛びこんだものが気になってしかたがない。かねて時限爆弾というのがあった、しばらく時間をおいて破裂すると聞いていたので、もしや、それがわが家に飛びこんでいるのではないか？ という心配も大きかった。それで耳の神経は裏庭にもそそがれていた。しかし五分……一〇分、何の変変わった様子もない。その時間の長いこと、身体全体がいらいらしてきた。馬町へんに目をやると紅蓮の炎とパチパチという焼ける音がはつきり聞こえてくる。が、一向に敵機来襲の様子もない。どうしよう！ あの焼けているへんには知人も多い。そうだ日本最初の被爆状況を後学のために見ておく必要もある。またあの裏庭の時限爆弾？もどうやら大したものでもなさそうだ。万一破裂したときは、そのときのことだ、と腹をすえた。

現場へかけつける

とにかく現場にいつてみよう、と家内にその旨をつげ、メガホン片手にとびだした。五条坂（当時は元の狭い通りであった）を東に、東山線を南に曲ったところには、すでに消防車が二、三台長いホースを馬町にむけて伸ばし、盛んに送水の機関の音が高くひびいていた。馬町まできてみると、あの坂道には放水の水がどんと流れ、それがあとから氷りつき、その中にガラスの破片が一杯とびちり、靴がつるつるすべり、その危険なこと。両側の家からは、うす暗い中にチラチラとろうそくの火がみえる。とくに北側の家はどの家も戸や障子が全くない。すべて爆風で吹きとばされたようだ。どうやら小型爆弾が相当数あちこちにおちた様子である。東の方からうめき声を出している負傷者をのせた担架が幾組もやってくる。救急車が数台けたましいサイレンをひびかせて往復している。

火の手はどうやらくいとめたらしい。しかし、きなくさいにおいが鼻をつく。馬町通りの北側

の知人の家を見舞いに、うす暗い中に一步ふみこんでみると建具は全部ふきとばされたとみえて、ずっと奥まで何も無い。寒風が吹きぬけている。真っ暗でよくみえないが人の気配がするので、声をかけてみると敷かれた蒲団の上にうすくまっていたらしい家族の姿がうごきだした。

「みなさんごぶじですか」

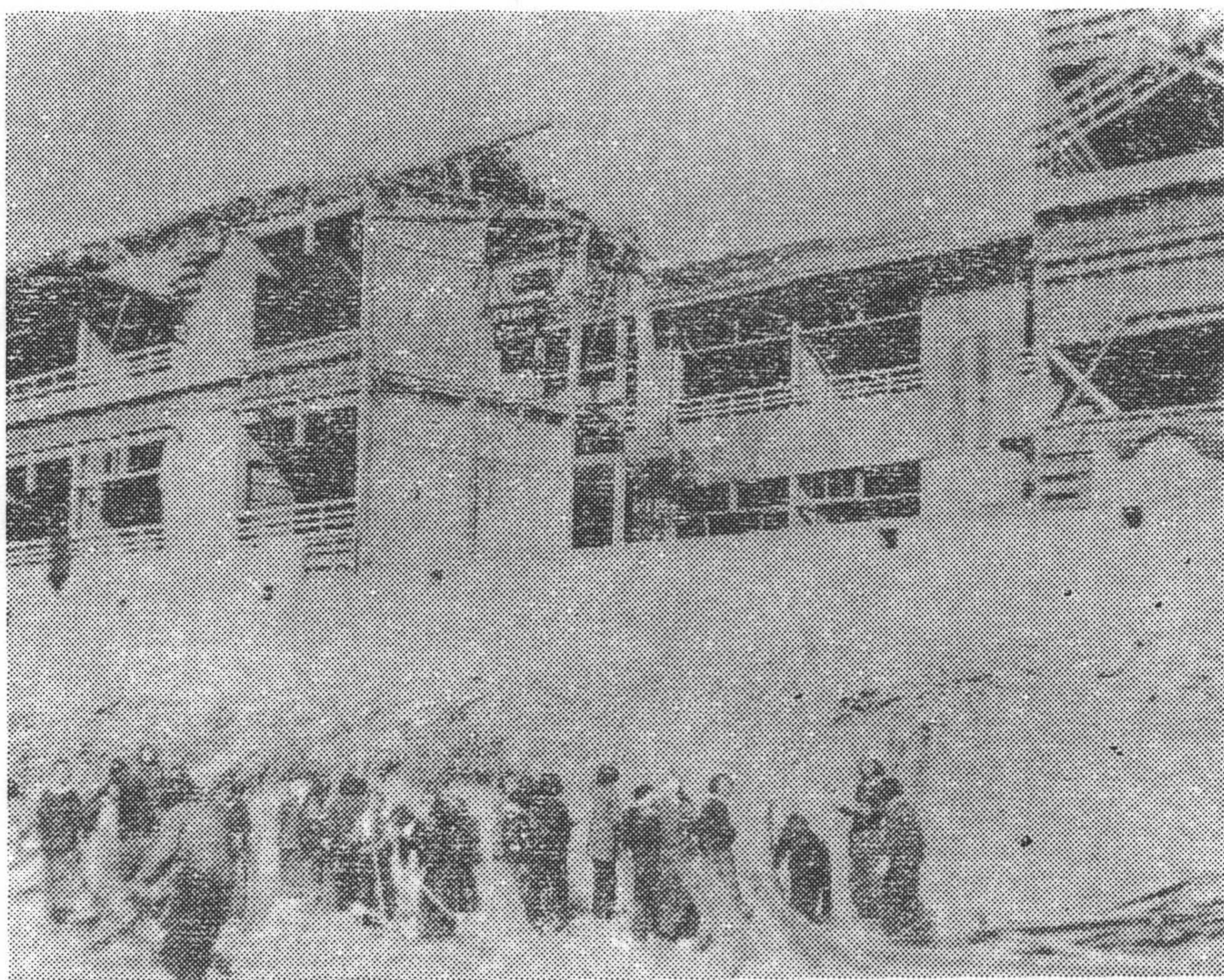
「はあ！ おかげでみなぶじです」と、うれしそうな女の声が返ってきた。

老夫妻と、主人の居らぬ留守を守る主婦と女兒二人の五人家族は放心したように上からの指令を待っていた様子である。どうやら私が最初の見舞い客らしい。この家は外観の割に被害の少ない様子にほっとして辞去、足を東にむける。

爆弾で家の一角が吹きとばされたらしい所も二、三か所あった。さらに東にむかう。うす暗いこの坂道には何本も消火のホースがのたうち、氷った水で足はとられがちである。しかし消火に従事する人達と、避難してゆく人のむれと、その中に狂気のように走り去る人のほかには案外人通りがない。淋しいくらいである。深夜のためか、情報が極端におさえられているためか、それとも見舞いにかけてつけるほどの血気の間人がもう居ないためか、実に意外、鬼気すら感じた。

バケツで女寮を消火

私の頭にはまだ敵機の大挙来襲の不安が残っているので、道ばたに聞こえてくるラジオの声に耳をそばだてながら小松寺の前を南に回り、京都女専（今の女子大学）の寮に知人を訪ねようとした。ところがその一角から火がチョコチョコとくすぶっている。もんぺ姿の寮生らしいのが二人放心したようにつつ立って泣いている。私はとっさにメガホンで寮に向かって叫んだ。



寮松小第三女京

「バケツを持って集まれ」。一〇人ほどの人が集まった。道端の各家の前に配置されてある小型の水槽の水を次から次にバケツリレーで運び、どうやら火も消えたので、急いで道を西にバツク。土橋のところを南へ、京都女子学園の裏門の方に回ってみた。どうやらこのへんに爆撃が集中して被害が多いように思えたから。やはり半焼けとなり、やっと消しとめた家や、家がバラバラに半壊している家など実に目もあてられぬ惨状にぼろ然となった。そのまん中へんに知人の家があるので、その前で暗がりに向かって大声で安否を尋ねたら半壊の家の中から娘さんが、はうようにして出てきて、うちは奇跡的に全員無事だった、という。ああよ

かった、と道をバツクする。どうも爆弾は狭い路地や家の裏側に多くおちているようである。私は自宅のことや町内のことが気がかりなので、帰途一、二の家を見舞い、いそいで家に戻

った。しかし次の空襲がどんなふうに行ってくるのかが大心配で、ラジオをかけたばなしにし、防空服のまま横になったものの、終夜まんじりともせず夜があけた。空襲はつづいておこななかった。

きびしい情報統制

翌朝あらためて被爆地を回って見た。西大谷の墓地にもかなり爆弾がおちたとみえて、あちこちに石塔が倒れたり墓石の角が欠けたりするのが目立った。とくに北側の寺院では、幼児を残して住職一家が全滅という悲惨なことも起こっていた。しかし当時は敗戦の気配がこく、国民の士気の動揺を極端におそれた当局のきびしい情報統制により、われわれにもその正確な被害状況が知らされないままであった。しかしあとから、そのときおちた小型爆弾の数は百数十発、死者三、四〇名、傷者は百人に及ぶということを聞いた。

その後二か月ほどへて三月九日の夜から一斉に東京、名古屋、大阪、神戸と大都市が軒並にB29の集中大爆撃をうけ、その被害の大きくまた悲惨なことは言語に絶するものがあつた。

その中であつて京都はいつもその上空をB29の大編隊が通過するのを見上げるのみで今日は京都か、今日は京都かと、空襲警報がなるたびに、ひやひやしながらついに敗戦を迎えることになった。それで全国の人たちは京都には空襲がなかったと思つている。いや京都人の中にすら、そう思っている人がいるようである。しかし敗戦まぎわには西陣にも一トン爆弾がおちているし、右のごとき馬町の被害も決して少なくはない。その犠牲者や戦災者のことを思うと、その実状を黙殺することは許さるべきことではないと思ふ。

最近、全国の被爆都市の犠牲者の霊をまつてあるので有名な姫路市の手柄山中央公園に出

かけてみたが、その被爆地図にはもちろんのこと、被害都市の名をきざんだ石碑の中にも、京都市の地名はなかった。これでは京都の犠牲者は浮かばれないし、また被害者の悲しみもぬぐわれまいと思い、あえてペンを執ったしだいである。

(昭和四八年九月彼岸)

目をおおう修羅場

宮 川 友 治

夜一一時二〇分を少し過ぎたころ、シューンポンという音に目が覚めました。母親と二人で二階に寝ていた私は、いそいで下へおり道路へでてみました。停電でそとはまっくら闇でしたが、いまの下馬町郵便局にあたる家と、近所のでんぷら屋から火の手があがっているのがわかりました。一月の中旬という厳寒の折で防火用水の水は氷っており、防火作業ははかどりませんでした。近所のあき地(いまの渋谷派出所の東側)には死体が幾体も横たえられ、足が爆風で吹きとんでしまったものや、体中血だらけで性別のわからなくなったもの、爆弾の破片が腹部に突き刺さったままになっているもの、あるいは貫通して腹わたが多量の血塊とともに吹きでてしまったものなど、目をおおうばかりの修羅場と化していました。